C 39　幼児期における健康知識の習得に関する研究（第３報）
－栄養知識とくに食品の働きについて－

群馬女子短大　笠原　賀子

【目的】幼児が「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」[1]ためには、幼児の発達段階に応じた健康教育を行うことが必要である。本研究は、第２報の結果より、食品の名称に関する知識度・経験度の高い食品について、その働きに関する知識の面から調査を実施し、若干の知見を得ることができたので報告する。【調査方法】①時期：1991年12月～１月　②対象：群馬女子短大附属幼稚園園児（年長組：５，６才）のうち、すべての食品の名称を正しく認識した６８名（♂33名，♀35名）およびその母親　③内容：食品の名称や働き（A.力のもととなる食品　B.血や肉を作る食品　C.バイキンをやっつける－体の調子を整える　D.骨や歯を丈夫にする　E.うんちを出しやすくする－食物繊維）に関する知識について　④方法A:幼児１人１人を個別に面接し、３つの絵カードを提示してその名称を問い、さらにその働きについて３つの絵の中から正しい１つの絵を選択させる方法。方法B:常用５０食品を「６つの基礎食品」に分類する質問紙を配布、回収し、母親の栄養知識の指標とする方法。【結果および考察】①食品の働きに関する知識度は「 3.0±0.95」であり、その分布は性や年齢($p<0.1$)により異なる。②食品の働きに関する知識度のうち、A.C.は比較的高いが、D.E.は低く、とくにB.が顕著である。また、A.は年齢差が有意($p<0.01$)である。③知識の誤答例に、食環境や栄養に関する認識の変化がうかがえる。④母親の知識度は「36± 9.5」であり、個人差が大きい。⑤幼児と母親の知識度は、B.($p<0.1$)以外あまり関係がないことから、栄養や健康に関する母親と幼児の話題の貧弱さが予測され、逆に、その必要性を示唆する。

[1]文部省：新・幼稚園教育要領